研究ノート

善のリストを検討する（その二）

伊集院　利　明

２－１　アリストテレス的解答を参考に考える

快は善かという問いは、アリストテレスに言わせればばかげたものである。あらゆる活動、感覚器官が十全に働くならば、そこにはいずれにおいても快が伴うことになる。快の種は活動の種ごとに異なる。活動と快楽、そしてそもそも生と快は切り離せるものではない。問題にすべきなのは、快楽は善いかではなく、どの快楽が善いかということである（『ニコマコス倫理学』第十巻）。

私自身にはアリストテレスの快楽説が全体として支持できるとは思えない[(1)]し、ここでその検討を行うつもりもない。ただ、快楽を一括して一つのものとしてとらえてその善について論じることに対する疑念の点で、大いに傾聴すべきものがあるように思われるので、ここではその点にのみ論題を集中させたい。

例えば「快楽は善い」を「音は心地よい」と比べてみよう。後者については当然「どの音も心地よいというわけではあるまい、心地よいかどうかはどのような音かによるであろう」と言いたくなるであろう。音は多様である。しかし快も多様ではなかろうか。この多様さは、多くの論者が認めざるを得ないものであると私は考える。この点（多くの論者云々）を先送りにして、まず快の感じられ方についての私自身の実感を言わせていただければ、私は快には快としての感じられ方の共通性がありながら、同時に、快と感じられるその感じられ方に多様性、異質性があると感じる。やや強引な進め方のように思われるかもしれないが、態度説や様々な形態の感覚質説を取った場合にどういうことになるかをとりあえず後まわしにさせていただき、やや大雑把な形で、ある程度は私の感じ方を前提的背景として、快の種によって善さに大きな相違がある可能性があるということを論じ、その後で、態度説をとっても、また感覚説のどの形態を取っても同様の結論になることを示していくという手順で進めさせていただくことにしたい。

注記的なことを二つほど追加しておく。第一点。さきほどの「音は心地よい」の論に対して、次のような反論が考えられるかもしれない。快にはその反対の苦があるが、音にはその

反対はない、そして快と苦の軸において快の方向への程度、強度が高まることに善さの程度が相関する、音と快は事情、構造が全く異なるではないかという反論である。しかし、それならば、かりに音のうちの心地よいものを「オト」、不快なものを「アタ」と表記することにしよう。そしてこんどは「オトは健康に良い」を「快は善い」と比べてみよう。オトのオト性と、健康へのよさにはある程度の相関関係があるであろう。この場合、現象の一部しか見えていない人には、この相関はかなり決定的なものに映るであろうが、オト現象を全体的に見ている人には、オトだからと言って健康に良いとは限らないこともあるということ、もしくはすべてのオトはそれなりに健康によいが、中にはごくわずかしかよくないものもあるということが見てとられるだろう。オトについても快についてもアプリオリな論だけからはオトと言っても健康に良いとは限らないかもしれない（快についても同様）ということ以外は帰結しないように見える。

第二点。「種によって異なるかも」という言い方は、アリストテレスに引きずられたものであり、訂正せねばならない。例えば1980, 90年代の sex に関する哲学的議論において、sex に、生殖、愛等との間に必然的関係があるわけではなく、sex が必然的関係を持つものがあるとすればそれは快であるということが提唱されてきた。そしてそれは学界の標準的見解に近いものになった感がある（cf. Primoraz 1999, Halwaii 2000）。しかしそうした議論では、快の多様性が見失われているとの指摘がなされている（Morgan 2003）。正当な指摘であろう。Sex の快はきわめて多様であるように思われる。一方の側にとって痛いだけのはずのものがその一方の者にとって強く快と感じられるという、よく参照される例から考えてみても、sex の快というものにはさまざまなものがある。快は活動の種の中でもかなり異なり、ある種のある状況における快が、別の種の別の状況の快とある種の親近性を持つことがあり得るように、快は様々な状況、行為のあり方、能動性のあり方などとの連関の網目の中へのおかれ方次第で、そのあり方、感じられ方を大きく変えると考えるべきであろう。

快の快としての感じられ方、あるいは快のあり方が対象や状況その他によって大きく異なるとしたら、その感じられ方、あるいはあり方によって善さが異なるということは十分考えられることである。

快の質を問題にしたミルは、快の快としての価値の問題場の中に他の価値（道徳的価値、美的価値）を不当に紛らわしこませてしまっているとして批判される。低級な能力に由来する快と高級な能力に由来する快を両方とも経験した者は、後者でなければ満足できなくなるというミルの議論は、しばしば、こうした混同を如実に反映していると評される。選ぶ側が快の快としての価値のみに着目して選ぶとは限らないからである。しかし、私がここで問題にしたいのはあくまでも快の快としての感じられ方、ないしはあり方である。音はすべて音

と一括され、快も快と一括される。それでも音の感じられ方、聞こえ方、快の感じられ方は、音や快によって大きな違いがないであろうか。音の快さ、健康さ、快楽のよさに質的な違いがないであろうか。音ならば当然、音としての快さに差があるであろう。では、快の快としての善さに差があって何がおかしいであろうか。チョコレートを食べる時の快さの感じと、何か大きな達成をしたときや、友愛の貴さを感じた時の喜びの感じを比較したとき、感じられ方そのものに質の差と価値の差があるように思えないであろうか。脳（の快楽中枢）に電極を差し込まれたネズミの快と、セックスの快と、本を読む時の快とは、快としての感じられ方や価値が同じなのであろうか。

私は、快に共通性がありながら、快としての感じられ方に相違があるという立場で話をしてきたが、ここで（やや大雑把になるが）快についてのほとんどの立場においておそらくは成り立つであろう議論として、次のような例を考えてみたい。気の狂った科学者があなたの子供を人質にとり、助けてほしければ手術を受けろと迫る。その手術を受けると、ある一分野の快感以外の快感が一生感じられなくなる。ただし、どんな快を残すかは自分で決めてよいと言われる。子供はもちろん助けるが、では、（かりに道徳的、美的価値等にあなたがまったく関心がなく、そしてそれらを切り離して考えることが可能だとした場合）どんな分野の快でも構わない、まったく希望などないと思うだろうか。人によって違うと言われるかもしれない。しかしそれは分野（など）によって差がないことを示してはいない。どんな映画に行くかは人によって違うと言われるが、それはどんな映画のよさも同じではないということとまったく矛盾しない。いや実は人によって違うだけではなく場合によっても違うのかもしれない。例えば余命が三年しかなく、人工呼吸器につながれて何もできない状態で、ある機械につながれ、ある種の快楽だけをその機械によって三年間感じさせられるようになるとして、快の選択ができるとした場合、先の場合とは違うものが選ばれるかもしれない。それでも善さが場合ごとに異なって判断されるだけであって、同じであるということにはほど遠い。さらにまた、かりに天国が快感だけの（つまり他に何も善いことのない）場だとしたら、天国に行くとして、選べる場合に何の希望もなくどんな快でも構わないと思うだろうか。－－これに対して「あなたは性的快楽をどう思っているのか」と問われるかもしれない。それに対してはとりあえずは二つのことを言っておけばよいだろう。第一に私は性的快楽が価値が低いとは言っていない。性的快楽を重視することと、快に快としての価値に差があることを主張することとは何ら矛盾しない。第二に、性的な快の中の差はきわめて大きい。どちらにしても、単なる肉体的刺激の快には大して価値はないようには思われる。「酒はうまいしネエちゃんはキレイだ」という文句で想定されているものは単なる肉体的刺激ではないはずだ。

ここまでの論は、ある程度はどの快楽説にも適応できるような論じ方をしてきたが、それでも中心になる前提的な快のとらえ方として私の感じ方にそうものを基本的な前提にしてきた。それは、快には快としての感じられ方そのものに共通性と異質性があるというものだが、より詳しく言っておくと次のようなものである。ある感覚Aと別のBを感じそこに快感を覚えるとき、あるいはある事態（pleased that の that の内容）Cに快を感じるとき、それぞれに快の感じa、b、cがあるが、a、bはA、Bとまじりあい、わかちがたくあり、cもCについての感覚と同じような関係にある。a、b、cは快としての感じられ方に相違があるが、それでも快であるという点で共通している。これが私の実感である。実は私はこれが快についての庶民的な実感に一番近いのではないかと思っている。それについてはあまり自信がないが、はっきり言えると考えられるのは、感覚説が庶民の当たり前の理解であろうということである。少なくとも哲学的な詰問を浴びせかけられる以前には庶民は快さの感覚というものが共通してある（distinctive feeling theory 的発想）と思っているはずであり、子供はどう快を感じるかによって快をとらえているはず（Moen 2010（528））だ。- - もう一つ言うと私が臆面もなく私の感じ方を基本的土台に据えてここまで話を進めてきてしまったのは、実はこの感じ方が、私が理解する限りでは、先（２－０）に挙げた「like 感覚説」と名付けたものの理解の仕方とかなりの程度に相関、対応関係を持っているからである。この説は、感覚説の21世紀バージョン（の一つ）と言えるものであり、科学的知見も活用した（そして洗練された、と私には思える）説であり、その意味で権威の裏付けがあったわけである。この説の代表者の Katz と Aydede は、*Stanford Encyclopedia* の、それぞれ、pleasure の項目と pain の項目の執筆者である。（like 感覚説について詳しくは２－10で扱う。）

では、態度説、および感覚説の様々な立場と対比させながら話を組み立て直そう。

そもそもこの二説の対立は、快に多様性があるということ（heterogeneity problem）のために起こっているわけだから、その意味では態度説は快の多様性を前提にしているし、またかなりの多くの感覚説論者も認めている。（頭ごなしの、共通な感じがあるに決まっているではないかといった断定[(2)]は内観だよりになり、論争のこの状況では説得力を欠く。内観のぶつけ合いは不毛である（成田2008）。）問題はその多様性を、あるいは多様性と統一性との関係をどう理解するかである。

態度説に関しては、本格的解明を２－８に送り、ここではやや簡単に論じておく。態度説論者の多くは命題的快（I am pleased that）の場合にも、何らかの感覚 feeling がともなうとする[(3)]。私が理解する限りでは態度説の大勢は、様々な感覚や、ある事態（I am pleased that の命題部分）に対する感覚に肯定的態度が向けられるとき、それらの感覚が、快として成立すると理解する立場を取る。２－８（および２－９）で論じる理由により、私はこれ

が態度説にとっての最も合理的な選択肢、あるいはひょっとして唯一の生き残りの道ではないかと考えるのだが、（その理由の説明を先送りして）この理解を前提に話を進めさせていただく。しかし、この立場で考える限り、態度説は快楽の中に善さに差があるという可能性をきわめて強い形で残してしまうことは明らかに見える。

態度説の肯定的態度とは何なのかは論者によって異なる（欲する、好きである、続いてほしい）が、その中の一例として、「私の続いてほしいと思う感覚」をとりあげ、これを、「私の好きな飴（あるいは音楽あるいはまた別のもの）」と、比較してみよう。好きな飴にも随分と差がある。好きさの度合いだけでなく、好きのあり方、好き方自体にも差がある（私はベートーヴェンのハンマークラヴィアソナタもクラッシュのファーストアルバムも好きだが、好き方がずいぶんと違う）し、それ以上にその飴が善いものであるのか、おいしいものであるのか、またその他のどの性質を取っても、きわめて大きな差があるはずである。態度説は、快に様々な点で差があることと両立するし、両立するという以上に快によさの差があることの可能性をきわめて強く残してしまう。

感覚説については話がやや煩雑になる。いま扱っている問題の観点からは、感覚説を次のような形で分けて考えるのがわかりやすいように思える。例えば、秋の涼風が当たる感覚をA、音楽を聴く時の感覚をB、テニスをしている時の感覚をCとしよう。ABCと快の感覚がどういう関係にあるのかのとらえ方のパターンを次の分類で整理できると思われる。

１、Aに快感a、Bに快感b、Cにcが伴い、例えばAとaはともに感じられる、あるいは混交して一体化して感じられる、あるいはaはAの何らかの側面である。abcに相違はあるが、快感であるという点を共通項として持つ。

２、ABCにそれぞれ快感が伴うがそれらはいずれも全く質的に同じ快感hである。（ABCとhとの関係については１と同様に様々。）

３、ABCの感覚自体が快感であるという共通項を持つが、ただし、それぞれ快としてのあり方などには何らかの点で差がある。

４、ABCの感覚自体がいずれも快感であり、快感であるという点で何ら差がない。

感覚説は通常は、distinctive feeling説、hedonic tone説、dimension説などに分類されるが、この１～４の分類は、１，２でABCとabc（あるいはh）との関係を多様に含めている[(4)]ので、その分類上の対応は必ずしもうまくいかない[(5)]が、今問題になっている問題のためにはこうした分類の仕方が有効に思える。

そこで、まず１，２についてだが、快の質の差があるという主張は、２の方に関してより困難さがあるように見えるであろう。しかし２についても成り立つ（あるいは、１と２の分類を厳密に考えることは実はそもそも困難なのかもしれない）。２の立場と考えられる

Kagan 1992 、Hurka 2011を見てみる。Kagan 1992（72-73）は、うるさい音のうるささは様々だが、うるささはどれも共通しており、我々はうるささというものを音から切り離して感じることはできないが、それでもうるささという共通項があることを感じ理解することができるのであるから、同じように快が感覚 ABC から切り離しては実感できないということは、快という共通項がとらえられないということを意味しないのであり、快はうるささと同様の構造のものであると考えることができるとした。Hurka 2011（9-11）もこれにならう [(6)]。実は、うるささを例にすることは説得力の点で欠陥を抱えることになるのだが [(7)]、論旨は明快なのでその点は無視する。しかし、快の共通性をこのように考えるなら、快に善さの差があり得ることになることは明らかであろう。うるささは不快なものである。しかしどのうるささも同じように不快とは言えない。例えばハードロックが好きな人間にはハードロックの耳をつんざくような音が心地よく感じられるが、道路工事の似たような音量の音は不快である。例えばこの宇宙ではある一定以上の音量を出すことが物理的に不可能になっており、すべての人類がハードロックが好きであるとしたら、うるささはたいていは不快だが、一種類だけは例外であることになる。これにさらに、「うるささはかっこいい」「うるささは不良っぽい」等の例をどんどん挙げていって、「快は善い」と対比させてみるならば、こうした１，２の考えを前提にすることは、快の善さの質的差を否定するよりはむしろ可能性の色調を強く印象付けてしまうことになるだろう。さらに、２のような考え方を指示する論拠のために今までに考えられた例の中で有力なものが「うるささ」であることを考えると、１と２の区別がどこまで厳密に考えられるかにも疑問符が付くことになるように思われる。２は１の abc のように異質性を持ったものとしてではない h を考えるわけだが、それでも（うるささのように）h が ABC と混交して感じられると考えざるを得ないならば、快の感じられ方は善さなどの点で質的差を生むということが極めてあり得そうになってしまう。（そして混交して別のものになるのか、混交して異質に感じられるだけなのかということを区別することにどこまで意味があるのであろうか。）

３，４の場合もたいしてかわりはない、その前に重要なことを述べておくと、３は私の主張にとってあまり問題はなく、問題があるとすれば４であるように見えるであろうが、４の立場をとっている人がいるのだろうかがやや疑問に思われる。Feldman と並ぶ快楽主義の大御所格である Crisp 2006（109）は、ABC と快の関係は、determinate と determinable の関係であり、赤、青等と色との関係のような関係であるとする。この主張からすれば（私の理解では）４になるはずだが、しかしそうだとしてもこれは Crisp の言わば公式見解にすぎないように思われる。というのも Crisp はほぼ同じ個所で次のように述べているからである。”Enjoyable experiences do differ from one another, and are often gratifying,

welcomed, by their subject, favored and indeed desired. But there is a certain common quality------feeling good”（Crisp 2006 109） “Eating, reading, and working-----（中略）----Of course they are all enjoyable in different ways and for different reasons, but they are all enjoyable”（110）－－Crisp は快の快としての感じられ方に違いがあることを認めたうえで、その上で feel good, enjoyable という点で共通性を持つと主張しているとしか読めない。Crisp の立場は 3 と 4 の間で揺れていると押さえておくのがよいだろう。そもそも determinate―determinable 路線は、それ自体の説得力の点で大きな問題を抱えている。「赤、青、黄」対「色」の場合、赤も青も黄もどれも visible であり光の波長であるという明確な共通性を持っているのだが、快の場合の ABC（およびその他のきわめて多様なもの）の間にはそのような共通項はない（単に感じであるというのはあまりにもうすすぎる共通項である、だからこそ多様なのだ）（Bramble 2013（207-8））。さらに言うと、「赤、青って何？」と聞けば誰でも色だと答える。赤や青にとって色であることは本質的である。ところが快と感じられる感覚はそれぞれに固有性を持っている。A、B、C はそれぞれ快であるよりもまず先に、まさに A、B、C であり、それぞれの独特の感覚である。こうした事情を考えると、4 の路線はかなり信憑性の低いものになると言わざるを得ないように思われる。3 は私の主張にとって特に問題がないように思えるが、どちらにしても、3 であっても 4 であっても、「音は快い」、「オトは健康によい」という先の事例を考えていただければ、音もオトも determinable であり、ABC に共通項があってもそれの共通した善さが保証されないことは明らかで、様々な具体例をさらに考えれば考えるほど、その信憑性が低くなってしまうということは、1，2 の場合と何らかわりがないと思える。もう一つ言うと、例えばすぐ上の Crisp の引用文であるが、そこで認められている共通性は、enjoyable であるという、かなりうすいものにすぎない。楽しまれ方が異なっても楽しまれるという点では同じである。しかしこれでは、ピカソのゲルニカも、アメリカに黒人の大統領が誕生したことも、チョコレートアイスクリームの味もどれも善いという点で共通するというのと何もかわらない。それぞれが善くても、それぞれの善さのあり方は極めて異なるし、程度も違う。これは Crisp の場合がこうだというだけの話ではない。というのも、もともとなぜ態度説と感覚説の論争があるかと言えば、快が多様に感じられるからであり、共通の快の実感があるかが定かではないからである。もしどの学者もがうるささのうるささを共通に感じたように、快を共通のものとして明確に感じていたのなら、論争はそうした快の感覚と、感覚 ABC とがどのような関係にあるかを主戦場としたはずであり、今のような形にはなっていなかったはずだ。だから、3，4 どちらにしても、もともと、認められる共通性はかなり薄いものにならざるを得ないわけである。

まとめよう。快楽がどれも同じように善いわけではないのではないかという疑念は、快楽説のどのバージョンを採用しても強く残るし、各説を具体例に即して検討すればするほどその可能性の強さは余計に際立ってくる。

快楽の多様性の主張の裏付けとなる事柄をもう一つあげておく。それは快楽というものがそれ自体、快の快としての共通性以上にそれぞれの固有の対象物や事柄の方に関心を差し向ける性質を持つのではないかということである。私自身、快をこのようなものとして感じているのだが、いかがであろうか。そしてこれは実は、先に「like 感覚説」と名付けた説の論者たちの主張である。ちなみに、like 感覚説は感覚説の枠内に収まるが、感覚質の共通性を主張しつつもそれぞれの固有性、違いをむしろ積極的に認める説と言ってよい。これについて詳しくは２－10で検討するのでここでは簡単にふれるだけにしておく。もう一つ付け加えると、like 感覚説論者たちによれば、快にこうした特質があることは 科学的見地からのかなりの裏付けのあることであるとのことである（Katz 2006,　Aydede 2000）。もしこれが正しいとするのなら、本セクションでの快楽の多様性を廻る主張は一層裏付けられることになるだろう。

２－２　経験機械的思考実験

２－２－１　経験機械

２－２では経験機械的思考実験をいくつか考えてみる。

その前にまず経験機械自体について。- - まず後の話を分かりやすくするために、経験機械の議論に対して、自分ならボタンを押すと応えることは、次の理由によりあまり反論にならないと扱うのが学界の標準的理解になっている（cf. Kagan 2013（253-6））ということを整理しておく。第一に、多くの人間がボタンを押さないと答えるということが厳然たる事実としてある以上、それの理由が説明されねばならない。第二に、ボタンを押す人はこの世界が苦しいので快楽を求めて経験機械の世界を選ぶのだと解釈するのが妥当に思われるが、そうであるならばそうした人にとってこの世界でのマイナス価値が様々なプラス価値（経験機械の世界にないもの）を上回っているわけであり、そうならば経験機械の中の生にそのプラス価値が欠如していることには何らかわりがないと理解するのが妥当なように思われる[(8)]。

本題に戻る。もちろん経験機械の議論は、快楽こそが善いという立場に向けられているものだが、私にはこれは、快楽は善いという常識に対してもある種の重要な疑念を投げかける働きをするものとなっているように思える。

と言うのも、経験機械の中の人の快の善さは、あまりにも色褪せたものに（経験機械の外

にいる我々には）感じられるからである。重大な事業を成し遂げた時の達成感の喜びの、親しい人と食事をしている時の食事の味わいの、友といる時の喜びの、あれらの喜びの輝きはどこに行ってしまったのだろうか。喜び、快楽というものは我々の生にとってかなり重大なもので、貴重なものではなかったのであろうか。マティスの絵に感じられるようなあの「生きるよろこび」！はどこへ行ってしまったのであろうか。

私が読者に受け入れさせようとしている私の直観の正体は、私が理解する限りでは次のものである。（経験機械の中に欠けている価値とはノージックによれば現実とのかかわり、何かを現実的に成し遂げることや自分でやること、自分が一定の者であること、であるが、このうちの達成を例にとる）－－快の価値と、達成の価値を足しても、それらの総合にはだいぶ及ばない。快と達成が合体することによってある種の organic unity が形成されそこに大きな価値が生まれる。快を他から切り離して見る限りでは、快の価値には大した大きさはない。－－この主張を立証するようなノックアウト議論を構成することはかなり困難なことに思えるが、それを支える考察、議論をある程度は第２節の全体の中で展開していくことができるように思える。２－２で以下に展開される論の中にもそれはかなり含まれるが、２－２では、もっと幅広く快の重みについての疑念を与えるための論を、様々な形と角度で、矢継ぎ早に次々と提示していくという方針を取る。

２－２－２　１対0.3×２

二つの世界があるとする

Ａ－－達成が１×ａあり、快楽が０

Ｂ－－達成が０で、快楽が１×ｂ

ａ、ｂは定数で、well-being 価値のみの点で選ぶとしたら A、B のうちどちらで生きるかをあなたが聞かれた場合に、あなたが迷って選べないようになっている、もっと言えば、A と B があなたにとっては等価になると思えるように a、b が設定されているとしよう。そこでもう一つ別の世界を考える

Ｃ－－達成が0.3×ａで、快楽が0.3×ｂ

Well-being 価値だけの観点で選ぶとした場合に、C と、A（B と等価）のうちのどちらを選ぶ（のが適切）か。私の直観および欲求は C である。

これは私の個人的実感にすぎないのであろうか。（「実験哲学」でもかじっておけばよかったという気に多少はなるが）もし「微妙である」と思われるなら、いやより正確に言えば「明らかに A である」のでない限りは、何らかの程度の organic unity 形成が認められるという主張が支持材料を得ることになる。（私には、多くの人がこれを「明らかに A である」と主

張するだろうとはとても思えない。）

２－２－３　永遠快楽世界

前の話と似たものになるが、今度は二つの生で

A －　－ 快以外に善いことはない。まあまあの快楽。ただし永遠の命。快楽については、うまいこと、飽きることの絶対にないように調整されている。

B －　－ 人並み以上の、いや、人間としてはかなり上位クラスの達成を成し遂げる人生。その他の善についてもまあまあ。だいたい平均寿命の年齢で死ぬ。

飽きることがないという設定に無理があるであろうか。永生を獲得すれば人間はどんなことにも飽きてしまうことになるのではないかという問題についての哲学の論争がある[(9)]。私はないと主張する立場であるが、ここでは立ち入れない。いずれにしても、ないように設定できたと信じたとかりにしてどちらを選ぶかという問いかけは、それほど無理には思えない。どちらを選ぶか。－－Ａかもしれない。しかしＢの人生を少しずつ長くしていってみて、達成の内容ないしは量を少しずつ改良していって考えてみるとどうだろうか。だんだん微妙になって来るであろう。リスト内の善の充足量の総和によって価値が決まるとするなら、今のようにいくら増やしても、有限である以上は無限大には負けるはずである。微妙であるとするならば、快には（単独では）大した価値はないということになるであろう。死の悪についての、死の悪は、生の中のあり得たかも知れない善を奪う消極的悪であるという哲学界の標準的見解（および、生自体が善いというよりも生の中のものに善さがあるという哲学界の多数派の見解）に照らし合わせる限り、これを否定することは難しいように思える。

２－２－４　「ふさわしくないことについての快」の問題から

A －　－（道徳的に）悪いことをしながら、それに快を感じる状態

B －　－ 自分が悪いと思うことをしながら、そこに快も苦も感じない状態

一か月の間のこととして選ぶならおそらくはほとんどの人はＢだろうが、一生続くとしたら、しかも他に快が与えられないとしたら、微妙かもしれない。それでも微妙という程度ならば、快には大した価値は無いということが帰結するだろうか。

いや、それでは道徳的価値と快が争うことになる。Well-being だけの観点からの選択にはならない。－　－ たしかにそうである。では少し例を変えよう。

私は少なくとも現在では野球というスポーツにほとんど関心がなくプロ野球にも関心がない（どんな選手がどこのチームにいるかもあまりよく知らない）。同時に私は子供のころからＧというチームがきらいであり、高校生ぐらいのころまではよくプロ野球を見ていた（こ

の話はフィクションであり、実在の人物、団体とは関係がない)。現在ではプロ野球に関心がほとんどないくせに、相変わらずＧが優勝しなければいいという気持ちはいつも持っている。こんな私のＧにたいする態度が変わらないまま、悪霊により

Ｃ － － この私が、他の一切の快楽を奪われながら、Ｇが勝つと快感を感じてしまうようになってしまっている状態（そして、そのこと自体に対して不快を感じない状態[10]）

と

Ｄ － － 何の快楽も感じない（その他はＣと同じ）状態

を比較して、どちらを選ぶか。

快がそれ自体として善いものであるなら、Ｃになるはずである。私はプロ野球自体に何ら関心を持っていない。自己一貫性というものは局面によってはきわめて重要だが、このようなことについての自己一貫性などにほとんど価値などないと思っている。私が考える限り、ここで快の犠牲になる、あるいはそれに対立するもので問題となるような価値が特に存在するようにはどうしても思えない。

しかし、Ｃ、Ｄの選択は私にはどうでもよいかあるいはたいへん微妙なことのように思えてしまう。もし快に対立する価値がここでは存在しないとする私の判断が正しいのなら（そして正しいように思えるのだが)、あるいはだれかが心底そのように思いこんだ上でＣＤの選択について上のような判断を下すとするのなら、快楽それ自体には大した価値はない（あるいはその人にとってはたいしてないものとして扱われる）ということになるように思われる。

２－２－５　ライフプラン等と快

Ａ － － 自分のライフプランにそぐわないようなものにのみ快を感じそぐうものには若干の不快を感じる状態

Well-being における達成の役割を重視する立場からすれば、これはとてもよいと見えない状態である(快と達成の価値の比較についてはここでは特に問題にしないことを断わっておく）

それに

Ｂ － － 友情を裏切るとお金が入る状態

を並べてみよう。ＡとＢを比較しても特に浮かび上がることはないかもしれない。

しかし、いろいろと考えてみると新しい局面が浮かび上がって来る。

反Ｂ － － 友情にふさわしい行動ほどお金が入る

これが通常の世界の現実のような形で起こるとしよう。友情、金のどちらをも重視する人にとっても、この相関自体にはたいした意味はないであろう。

しかし

反Ａでかつそれが通常の世界の現実のような形で起こる
この場合は話が全く別である。Ａと反Ａは極めて大きな違いとなる。

単に相関するということが重要なのではない。Ｂと反Ｂの間にも相関の問題はあるが、Ａと反Ａのような違いは持たない。反Ａにおいて organic unity が形成されていると見る方が妥当に思える。相関と言うならば、組み合わせにより相関に意味が大きな違いが生まれることにも注意したい。いずれにしても、単に相関性が加わることにより価値が増大するとは考えにくい。

また単に「ふさわしさ」の価値によるものとも考えにくい。反Ａと反Ｂでは似たようなふさわしさなのだが、効力が著しく異なる。

２－２－６　経験機械の逆バージョン

DeBrigaard 2010の経験機械の逆バージョンの提唱は、印刷出版前から PEASoup で取り上げられるなど、それなりに広い関心を集めたものである。

いま現実と思っているものが実は経験機械の夢だったとする。あなたは現実に戻るか(A)。

これに加えて、現実はモナコで大金持ちの芸術家である（B）と、終身刑で服役中（C）という設定ではどうか。さらに、「あなたの現実の生は、（よいかわるいかはわからないがとにかく）今の夢の生とはだいぶちがいますよ」と言われた場合（D）はどうか。

一般人相手にアンケート調査を行った結果は、戻る、戻らないの順で並べると

A　54%、46%
B　50%、50%
C　13%、87%
D　41%、59%

であったということである。

この結果から DeBrigaard は特にＡとＢとＤの関係に注目して、アンケートで働いたのは status quo バイアスであり、経験機械自体の直観（あるいはアンケート）においてもこれが働くはずである以上、経験機械の議論はそれほど効力を持たないと結論づける。

この論文がそれなりに注目された[(11)]理由は、議論内容よりもアンケート結果自体の面白さに由来すると思われる。ちなみに私には、status quo バイアスであるという結論が出るようにはとても思えない。問題になるのは回答者がどのようなものを現実と感じたか、あるいは「現実との関係自体に価値がある」と主張されるときに一体それが何を意味しているかということであると思われる[(12)]からである。

ただここで簡単に注目しておきたいのは、いくつかの数字（もちろん DeBrigaard 自身も

着目しているものであるが）である。ＢとＡで、Ｂの方が戻るが少ない。快楽だけからすればＢが多くなるはずである。これをどう説明しようとしても、快楽に（それなりに）大きな価値があるという主張を保持することは難しくなるように思われる。status quoバイアスで説明しようとすると、単なるバイアスと価値との対抗となる。バイアスは生においてかなり大きな力を発揮するであろう。しかしある程度理性的な判断がそれとしてなされる場合は話がやや異なるであろう。この場合はかなり明確に快の価値の問題がそれとして浮かび上がる選択肢設定である。モナコの大金持ちの芸術家という設定ほどあからさまなものは考えにくい。Status quoバイアスが経験機械問題の核心かはともかく、バイアスが働いたことは事実であろう。だが、いずれにしても、快楽の価値は単なるバイアスで打ち消されてしまう程度のものであるということになりそうだ。他の理解がこれをうまく避けられるようにも思えない。

（もう一つ、正直な実感を言うと、Ｃの13％という数字は、私には驚異的に高い！もののように思える。これも快がそれほどは重んじられていないことの論拠になると思うが、いかがであろうか。）

２－３　快楽主義のパラドクスと自己消去性

快楽主義のパラドクスは理論、主義の自己消去性の一例として理解されているのではないかと思う。しかし、快楽主義のバラドクスの場合と他の自己消去性の問題とでかなり大きな相違があることに注意する必要があるように思われる。

それを論じる前に、「快楽主義のパラドクス」という言葉にややミスリーディングなところがあることに注意を払っておきたい。快楽主義者は快楽をたくさん得ようと思ったら快楽主義の主張を忘れて、ものごとに集中した方がよい。－　－これはしかし、快楽主義者だけの話ではない。快楽というものは、快楽主義者にとってだけでなく、物事に集中しないと逃げて行くようにできている。快楽自体のあり方が中心問題なのであり、快楽主義者にとっての問題はそこから派生することにすぎない。

本題に戻って大きな相違があることを分かりやすくするために自己消去性の一つの古典的代表例とみなされるHare 1981の功利主義の二層理論を取り上げてみよう。－－この理論では、私はたいていは直観的原則に従って動く。その原則とは、うそをつかない、他人に親切にする、自分の能力を生かすように努力する、約束を守る等のものである。これによって私は典型的行為功利主義者のように行為の一々において功利計算をするというコストを削ることができる。コストには考えている間に好機を逸するということも含まれる。しかし私は原則ではうまくいかない例外的ケースの場合や原則自体の選択、設定の際には功利計算を行う。直観的原

則はたいていの場合にはうまくいくという便利なものにすぎない。しかし私が直観的原則をそのようなものと思ってしまったら直観的原則はそれとしてうまく機能しなくなる。私はそれに反する場合には葛藤等を覚えるほどにそれを内面化していなくてはならない。

ここには自己消去性がある。しかし快楽主義の自己消去性とこれはかなり事情が違うように思える。違いは何であろうか。快楽主義の場合は、快楽そのものの性質が問題を起こしているが、ここではむしろ我々のあり方が問題で、福利を最大化するために、最大化を心がけていればうまくいくように我々という存在ができているわけではないという説明では十分ではない。快楽の場合も、快楽自体はある感覚質ないしは態度を本質とするものであって、我々のあり方がそれをうまくつかめないようにできていると言えよう。

むしろ相違は次のように説明されるべきである。- - 一方のものが、ある理論的立場を取る時に生じる問題なのに対して、他方のものは決してそういうものではない。福利はそれ自体が逃げて行く[13]ようなものではない。あくまでも、最大化するという立場に立つときにうまくいかなくなるのである。それに対して快楽は違う。Hurka 2011（31-51）は、快楽はつねに by product であると述べるが、正当であろう。（Hurka 2011（31-51）には、快楽主義のパラドクスは肉体的快楽などの場合に必ずしも成立するとは言えないかもしれないこと、また、テニスを楽しもうとしてテニス場に行く（ただしプレーする時はプレーに集中する）こと自体は不合理なことではないといった、参考にすべき指摘があるが、一方で快自体がのがれやすい性格のものであることを強調する。）快楽主義のパラドクスは快楽というもの自体のあり方に基づくのである。だからこそ、功利主義の自己消去性はあくまでも功利主義のそれであるのに対して、先に述べたように、快楽主義のパラドクスは快楽主義のパラドクスという名前自体がミスリーディングであると言わざるを得ないのだ。

ここまでのところ、先に示した Aydede, Katz らの指摘を援用することなしに以上の主張に説得力が十分あることを示してきたつもりであるが、それをここで援用するならば以上の論の正当性は一層はっきりするであろう。快等が自分から対象物、事態の方へと注意を向けるようにできているとすれば、快楽（主義）のパラドクスが生じるのも当然のことだからである、つまり、ここでは快楽のあり方自体が問題を引き起こしていることになる。

快楽（主義）のパラドクスは自己消去性の一例と言うよりもむしろ特異なものである。それは快楽自体の問題である。

だから何なのか、と思われるかもしれない。こたえよう。本稿の第 2 節の論にとって重要なことは、まさに今述べたこと、つまり、快楽というもの自体の特異性である。つまり快楽は諸善の中でいま見た点に関して言うとかなり特異な存在である。このような性質のものは、諸善の中に他に見当たらない。善というものはいずれもそれなりに志向されるものである。

達成について言うならば、我々は基本的にはそれを目指しているし、それは生のある程度の全体においてだけではなく、かなりの程度個々の局面においてでもある。道徳的善にしても志向されていなくとも志向されるべきものとしてある。ところが、快については私は快の総量をおおよそ増やしていくことのできるように設計計画することができるだけで（Haybron 2008, Hurka 2011などによれば､そもそもそれすらもあやしいということになるらしい）個々の局面ではまさに「忘れた時にやって来る」ものである。もう少し言うと、快以外のものの善に関しては、志向と獲得等の間に相関関係があり、それは単なる相関ではなく一定程度の因果性を持った関係である。ところが快に関してはその関係がかなりルーズである。いや、ルーズであるだけでなくある程度言わば我々を裏切るような性質を持っている。（愛にもそのようなところがあるが、しかし愛とはそもそもそうした世界の中での身構えのあり方そのものでもあり、快とは事情が大きく異なることは明らかであろう。）クイア論法[14]によって善から排除できるほどに特異であると主張するつもりはない。しかし、私はこのような特異なものがwell-beingを構成する諸善のグループの中に入っていることに対して不思議の念をおぼえる。善ではあり得ないと言いたいのではなくただ不思議だと言いたいのである。

もう少し議論らしい形に書き改めよう。

快がかなりの程度に特異なものであるということが認められたとしよう。その場合は次のように言うことができる。動物園に行ってその中に一種だけ他とはあまりにもかわったものがいたら、「こんなものも動物なのか、いやまあ動物と言えないことはないかもしれないが、それにしてもそうだとすると動物とはそもそも何なのか、グループの成員は相互にどのような関係、共通性を持ち、全体の構造連関をなしているのか」と思うのが当然であろう。同様に魚屋さんの店先に様々な魚とともに、乳で子供を育てているような生き物の肉が並べられていたら「これも魚なのか、いやたしかに魚の格好をして海を泳いでいるが、しかし、魚とはそもそも何なのか、成員間にどのような関係構造連関があるのか」と考えるだろう。ゆえに快を含む諸善について相互の間の構造連関を問題化して考えようとしないことは不合理である。

しかし、上に論じた特異性はそれほどに大きな特異性と言えるのか。単なるちょっとした性質の差と言えるものではないのか。

私にはとてもそのようなものには思えない。善とそれに対する我々の志向というものは善にとって周辺的なことではない。むしろ、善と言って我々がまず思い浮かべるのが、我々が求めるものだということであろう。次のような論争がある。一方の人たちは、善とは我々が欲求するものである、いや我々の欲求を充足することこそが我々にとっての善であり、well-being であると言う。他方の人たちは言う、いや、欲求されるから善なのではなく善だから

欲求されるのではないか。先の人たちは欲求されるから善だと考えて何が問題なのかと言う。どちらの側もこういったことが論争の的になるほど、善とそれへの我々の志向、欲求との関係が善にとってきわめて重要であることを認めざるを得ない。

善と志向、希求との関係が、古代のギリシャにおいてきわめて核心的なものとして扱われ、それがその後の哲学史に反映され、現在においても問題になるということは、学者が問題を勝手に作り出しているということではない。善というものにとってそもそもこの関係が核心的なのだ。そして志向と獲得の関係が志向にとって核心的である以上、快の特異性は善の善としての核心に関わる特異性であると言わざるを得ない[(15)]。ある類の中に特異な種があっても、その特異性がある程度大きなものであっても、その類をその類たらしめる根本的な特質であると我々が思っているようなものに関わるのでなければ、それほど気には止めないであろう。しかし関わる場合は別である。

これに対して、「その言い方は特異性が核心的であることをミスリーディングに強調しすぎている、善にとって核心的なのは志向されることであり、快も志向されるにはちがいがなく、志向と本質的に結びつく獲得の点でのみ特異である以上、言いたてられているところの特異性の核心性は、核心性そのものではなく、そこから一段階遠のいた間接的なものにすぎない」と反論されるかもしれない。それに対しては、たしかに間接性はみとめられるべきだ、しかしその間接性は、たかがしれたものでしかないと、答えることができると思われる。志向というもの自体がそもそも獲得をみこしているのであり、志向と獲得にどのような、そしてどれほどの因果関係等があるかということは、志向のあり方そのものを決めてしまうような事柄である。快は関係を単にルーズにするという以上にむしろ我々を裏切るような性格すら持っている。例えば、常に裏切られ続けた場合に愛がどのようなものになるかということを考えてみるといいが、もちろん（例えばある種の親子関係等の場合のように）揺るがないものもあるかもしれないが、だいたいのものはそうはいかないであろう。概念的には志向は、その獲得との関係から区別して考えることができる。しかし現実に志向するのはなまみの我々であり、そのあり方は関係に大きく本質的に規定されざるを得ない。- - こうして考えてみると、反論の言う間接性は、みとめられるにしてもたいしたものではないと言わざるを得ないように思われる。そして、それゆえに、快の特異性がかかわる事柄は、快の善としてのあり方にとって決定的に核心的とまでは言えなくとも、かなり核心的である。そして、快の well-being 的善としての特異性は、かなりの特異性とまで言えなくとも、相当適度の特異性である。これを先の動物園の議論と合わせれば、本セクションの結論が帰結するであろう。

本セクションの結論は次のようになると思える。- - 快は諸善の中でかなりとまで言え

なくとも相当程度特異な存在である、それゆえ、快を含む諸善について相互の間の構造連関について考えようとすることなしに、それらを諸善と呼んで扱ってすましたままにしておくことは相当に不合理である。

注

（1） まず快楽が活動を完成するという主張で正確なところ何を言わんとしているのかの理解が容易ではない。そして一番重要なこととして、活動と快楽の関係がアリストテレスの言うように密接なものとは考えにくい。特別に活動を伴わないような快（脳刺激によるもの、安らいでいる時の快などなど）がある。また悪い活動を伴っていても快を快それ自体として見た時にその快が悪であるということにも説得力があるとは思いにくい。

（2） e.g. Tansyo 2007

（3） Feldman 1997（94-95）は快という感じが全く伴わないような態度的快が存在するとするが、これは説得力があまりないように思われる。Feldman 1997が挙げているのは著名な哲学者にお目にかかれるという例である。顔がしわくちゃで見ていてもそれほどは快感をもたらさないようの人物なのに、会えてうれしいという話である。しかしこうした実例には明らかに快感があると思える。（あるいはFeldmanは快とI am pleased toという言い方を混同しているのであろうか。）そしてそれ以上に重要なこととして、２－８，２－９で論じる理由により、態度説において何のfeeling, sensationもない快を認めることは、理論上の困難を招くことになると思われる。

（4） ただし例えばAとaを全く別（split説）と考えるとそれなりに問題が生じる（Moen 2013（534-537））。

（5） 私の理解では、distinctive feeling説は基本的に２、dimension説（Moen 2013, Kagan 1992）は１か２で、hedonic tone説は理解のしようで１，２にも３，４にもなるが、基本的には１，２だろう。４はCrisp 2006の公式見解。

（6） Hurka 2011がKagan 1992のようにdimension説を取っているのかどうかは不明。

（7） 快のない感覚はもちろんあるが、音には何らかのvolumeがともなう（Bramble 2013（209））。

（8） 第二の点だが、論としては循環論法とかわりのないようなものになっているように見えるが、それ自体直観的に見て妥当な理解に思えるだろうという主旨であると理解してよいと思う。

（9） これについては拙論「哲学の現実態序説（その二十三）」2011『愛知大学論叢』144である程度の詳しさで紹介したのでここではそれ以上の文献参照は煩雑さを避けるために省略する。

（10） 実際のところ、後で扱うAydedeの快楽の全体性の主張を考えた時に、二階の快楽と言えるようなものがどのようなものになるのか、そもそもあり得るのかについて、私は正直なところあまり十分なことが考えられない。

（11） もちろん、この論文は実験哲学がいかに無意味なものであるかを示す絶好の例だ、などの声もある。

（12） 私がこの話をしたゼミ生の何人かも同様の感想であったことを記しておく。

（13） 厳密に言えばこれも我々との関係の問題ではあるが。

（14） （用語解説）Mackie 1977が道徳的価値の実在性を否定するために用いたことで有名（「こんな特異なものが実在の中に入るわけがない」）。

（15） 実は私はこの特異性こそが、プラトンが快は善ではないとした理由の核心、もしくは核心の近くに存しているものではないかと考えている。

付記　本連載は（その七）までの全体が2015年９月に完成され投稿されたものである（投稿規約による）。

文献

その二で言及したもののみ。間接的言及等は除く。また翻訳を使用した場合も、著作年は原著の発行年を記し著者名も原語で記す（分かりやすさへの配慮のため）。

・Aydede M. 2000 An Analysis of Pleasure vis-a-vis. Pain3. *Philosophy and Phenomenological Research*. 41. 537-570.
・Bramble B. 2013 The Distinctive Feeling Theory of Pleasure. *Philosophical Studies*. 162. 201-217.
・Crisp R, 2006 *Reasons and the Good*. Oxford.
・DeBrigard F. 2010 If You Like it Does it Matter if it's Real ? *Philosophical Psychology*. 23. 45-57.
・Feldman F. 1997 *Utilitarianism, Hedonism, and Desert*. Cambridge.
・Halwani R. 2000 *Philosophy of Love, Sex and Marriage*. Routledge.
・Hare R. 1981 ヘア『道徳的に考えること』内井他訳　勁草.（訳は1994）（原著　*Moral Thinking* Oxford）.
・Haybron D. 2008 *The Pursuit of Unhappiness*. Oxford.
・Hurka T. 2011 *The Best Things in Life*. Oxford.
・Kagan S. 1992 The Limits of the Well-being.（in Paul et ali. eds. *The Good Life and the Human Good*. Cambridge. 169-189）.
・Kagan S. 2012 *Death*. Yale.
・Katz L. 2006 Pleasure. *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. revised.
・Mackie J. 1977 マッキー『倫理学』加藤他訳（訳は1990）（原著 *Ethics* Penguin）.
・Moen O. 2013 The Unity and Commensurability of Pleasure and Pains. *Philosophia*. 41. 527-543.
・Morgan S. 2003 Sex in the Head. in Power N. et ali. eds. *The Philosophy of Sex*. 2013. 101-139.（originally *Ethical Theory and Moral Practice*. 6. 2003. 373-410）
・成田和信　2008「快さについて」『慶應義塾大学日吉紀要人文科学』23. 1-21.
・Primoratz I. 1999 *Ethics and Sex*. Routledge.
・Tannsjo T. 2007 Narrow Hedonism. *Journal of Happiness Studies*. 8. 79-98.